

敬語表現の認識構造

三浦 つとむ

一

敬語法は、ちょっと見るとはなはだ複雑で、ふつうの場合とちがった特別な文法構造を持つているように思われやすいのです。しかし、けっしてそうではありません。国語の持つている基本的な文法構造は、そのまま敬語法をもつらぬいています。また、そうであるからこそ、ふつうの表現から敬語的表現に簡単に移っていくことができるのです。それなのに、敬語法はむずかしいと悲鳴をあげる人が多いのはなぜでしょうか。それは、国文法がまだ形式的にしかとらえられず、基本的な文法構造がすっかりつかまれてないからだと私は思います。表現の構造を見かけの上でとらえるだけで、認識の構造との対応や矛盾をすっかりつかまえてないかぎり、敬語法を正しく説明することはできませんでしょう。敬語法は、国文法の正否をテストする試金石といっても、いいすぎではないと思います。

言語は絵画とちがって、対象の感性的なありかたにしばられず、自由に記号のかたちをきめることができます。そのため、絵画では分離することのできなかった客体的表現と主体的表現が、言語では分離して、別の語で表現されるようになりました。客体的表現というのは、対象についての認識の表現で、主体的表現というのは、対象の認識に

あたつて話し手が作りだした判断や感情や要求などの表現です。時枝誠記氏は、これを言語のもつとも根本的な分類であると規定して、前者を詞、後者を辞とよんでいます。この規定はまったく正当です。敬語にもやはり客体的表現と主體的表現とがありますから、前者を敬詞、後者を敬辞とよびながら話をすすめることにしましょう。

二

言語にかぎらず、すべて表現は対象 認識 表現という過程をそのうしろにかくし持っています。敬語法も、まず対象のありかたかはどうか、それをどうとらえるか、から考えてみる必要があります。そこには、話し手と聞き手ばかりではなく、第三者がいてこれが話し手や聞き手と関係を持つていることが多く、また第三者同士の関係も問題になります。いずれにしてもこれらの人間関係に貴賤・上下などのちがいがあるときは、そのちがいを正しくとらえ、そこからその人間のありかたや行動のしかたについての特異なとらえかたをしていきます。もちろん、昔とちがいで、生れつき人間に貴賤があるというような考えかたはいまではなく、人間は平等だと見ているわけですが、それでも地位の上下はのこっています。地位の上下を正しくわきまえて、立てるべき人間を正しく立てると、社会は要求しています。それで、敬語的表現もそれなりに変わってきたものの、やはり必要とされるわけです。

ふつうの表現ですと、第三者同士の関係を

A 先生は B 氏に手紙を出した。

といいます。これが同格でなく上下関係だと

A 先生は C 君に本をくださつた。

になります。同格なら「くれる」ですが、これが敬詞化します。また、第三者同士は同格であっても、話し手がA先生に尊敬の念を持っているときには、 に

A先生はB氏に手紙を出された。

と接尾語を加えます。「れる」「られる」はふつう敬讓の助動詞とよばれ、「ます」「です」の敬辞といつしよに助動詞として扱われていますが、これらは敬辞でなく敬詞です。受身・可能・自発・敬讓・使役などの助動詞は、実は助動詞とよばれるものとはまったく異質のもので、接尾語であり、動詞に接続すると複合動詞になります。「出される」は「お出しになる」というかたちで表現することもあります。自発は当然にそうなるという認識で、対象がそうなるだけの条件をそなえていると認めるわけですから、人間の場合だと当然そうなるだけの能力があり資格があると承認したことになります。この承認が、この人間に対する敬意の表現になるのです。

第三者同士が上下関係にあり、話し手は下の地位にある人間に侮蔑をいだいているときに、 は

C君はA先生から本をいただきやがった。

となります。「やがる」は侮蔑をあらわす接尾語で、これも敬詞の一種です。

以上は、すべて第三者同士の関係と、それに対する話し手の意識でした。「くれる」「くださる」に、「もらう」「が」「いただく」に敬詞化し、また接尾語のかたちをとった敬詞が加えられました。これらのことばの聞き手に対する話し手の意識は問題外におかれていたわけですが、こんどは聞き手に対する敬意をそのまま表現してみましよう。

は

A 先生は B 氏に手紙を出しました。

A 先生は C 君に本をくださいました。

A 先生は B 氏に手紙を出されました。

のように、現実のありかたをどうとらえるか、第三者に対して何と意識するかとはまったく関係なく、いずれも「ます」を使います。このことは、敬詞と敬辞とが直接の關係を持たないことを示しています。

ところで、と をくらべてみますと、「出し・た」の中間に敬辞「まし」が入っています。これはけつして理由のないことではありません。実は「出す」というときに、そのうしろに単純な肯定判断が存在しているのですが、この部分は表現してないのです。つまり表現の省略があるのです。ですから、時枝氏のいいかたをかりれば、「出し・た」の中間には単純な肯定判断の表現を省略した、ゼロ記号があることとなります。この省略された部分が、聞き手に対する敬意を表現するときに、「まし」の敬辞のかたちで表面化してくるのであって、認識の構造上何もないところへ敬辞がわりこんでくるわけではありません。 についても、同じことがいえましよう。

三

助動詞「た」は、その上のごとは全体が過去に属することを示しています。したがって、「た」と表現するときに、話し手は過去の世界から現在の世界へ観念的に飛躍しているわけです。それゆえ、「ました」は一語ではなく、時を異にした二つの助動詞がつながっているものとして理解されなければなりません。いま、過去の世界の立場で「まし」と表現し、さらに現在の世界へ飛躍してから「です」と表現

すると、この敬辞の二重化によつて聞き手に対する敬意の表現はさらに強化されます。

手紙を出しました。

手紙を出しましたです。（二重化）

聞き手には敬意を、第三者には侮蔑を示すような矛盾した意識の表現にあつては、敬意をあきらかにするためにその表現を最後にまわします。 七

C君はA先生から

本をちようだいしやがつたんです。

というようなかたちになるでしょう。

事物に「ご」「お」「み」などの接頭語をつけて敬詞化するときには、いろいろの意識がはたらいています。自分の所有物なのに、「ごはんをいただく」というのは、天のめぐみというような、自然に感謝する意識で、自然と話し手が上下関係におかれています。「おみこし」「みかぐら」などは、神と話し手を上下関係において、物神崇拜の意識から生まれた敬詞化です。ところが封建時代には、殿さまからいただいた「お羽織」をそまつにしたといつて罰せられたり、將軍に献上する「お松だけ」が通るといふのでこれに土下座させられたりしていました。人間の貴賤関係がそれにむすびついた物にまで延長される、社会的な物神崇拜がはびこつていました。それで、貴賤・上下の関係があるときは、人間のありかたや行動のしかたばかりでなく、その人間とむすびついていゝる物までも敬詞化する習慣が、いまなおのこつています。その人間の書いた手紙はもちろんで、その人間へとどけられた手紙をも「お手紙」と敬詞化するのは、献上品の「お松だけ」と同じ理由によるものです。宿屋の番頭さんや女中さんは、お客と上下関係にあるので、「お手紙がまいりました」とか「お電話です」とかいいま

すが、妻が夫に同じようなことばづかいをするのは、男尊女卑の意識から来たものです。

そんなわけで、 はふつう

先生はC君にご本をくださつた。

といいますし、話し手と第三者が学生と教師の関係にあるとき、昔は

D先生はご自分の

ご意見をくわしくおっしゃられた。

というかたちが多く使われました。しかしいまでは「おっしゃられた」をあまり使わずに、「おっしゃった」「話された」のような簡単なかたちを使っているようです。

この二つは、大したちがいがないように思われますが、「おっしゃった」の場合は先生と話し手とが上下関係にあるものとしてとらえた上で、先生に対する話し手の尊敬の念を接尾語で示しているのですから、そこに微妙なニュアンスのちがいがあります。このちがいが聞き手に微妙な影響をおよぼすことになります。もしこのときの聞き手が、D先生の同僚であり先生だとすれば、先生と話し手は上下関係にあるものとしてとらえるほうをよろこぶでしょう。「おっしゃった」がふさわしいわけです。反対に、このときの聞き手が、話し手と同じような学生である場合、先生と話し手を上下関係にあるものとしてとらえれば話し手と聞き手が同格であるために、聞き手も話し手と同じく先生と上下関係にあることになってしまい、一種のおしつけが生まれます。そこで、先生に対する尊敬を話し手個人の意識に限定して、「話された」を使えば、おしつけにならずにすむわけです。

話し手が第三者と同格で、聞き手とは上下関係にあると

き、話し手が第三者に尊敬の念を持っているとすれば

E君は自分の意見を話されました。

となり、話し手が第三者より上の地位にあるならば

F君に嚴重に注意してやりました。

となります。課長が平社員の過失について重役に報告するときのような上下関係です。

敬詞「られ」と敬辞「まし」との性格のちがいは

おい給仕、社長が来られたらお茶を入れる。

隊長、敵のやつが近づいて来ました。

のように、同じ「来」に接続しながらまったく異質なことで、よくわかります。「られ」は社長に対する尊敬の念の表現で、聞き手の給仕と関係ありません。「まし」は聞き手の隊長に対する敬意の表現で、敵と関係ありません。ところが、聞き手と話し手とが上下関係にあつて

お食事をめしあがられましたか。

というときは、上下関係をとらえての敬詞も、上の地位の人間に対する尊敬の念を表現する敬詞も、聞き手に対する敬意を表現する敬辞も、すべて同一の人間に集中してしまっています。そのために、現実の単純な人間関係の上に成立している立体的な認識構造が平面的にうけとられやすく、「れ」も「まし」も同一の人間に対する敬意の表現だという事実が目をつばわれて、両者を同じように助動詞として扱うあやまりからのがれることもむずかしいのです。

敬語法の研究を、このような単純な人間関係の場合から始めるのは危険です。複雑な人間関係からはじめることが大切です。言語の研究にあつても、「人間の解剖は猿の解剖の鍵である」という、有名な金言があてはまるように思っています。

四

おかあさんはおつかいに出かけるわよ。

きさまには

おとうさんのこの苦しみがわからぬのか。

親が話し手、子が聞き手のとき、このような敬語的表現をとることがあります。現実の人間関係で見ると、自分で自分を尊敬しているわけで、異様な感じがします。敬語法として、特殊な場合のようにも思われます。

ここで注意しなければならぬのは、現実の自分が三人称として、話し手聞き手以外の第三者として扱われていることです。いうまでもなく、現実の人間関係では、自分と話し手は同一の人間なのですが、それにもかかわらず現実の自分が第三者として扱われているというのは、そのような特殊の認識が行われていることを意味しています。つまり、話し手の頭のなかで、現実の自分と話し手が観念的に分裂し、話し手は現実の自分の外部に位置を占めて現実の自分を対象としてながめているのです。しかも、現実の自分とこの観念的に分裂した話し手とは、上下関係にあって、「おかあさん」とか「おとうさん」とかよんでいるのです。ところで、聞き手である子どもは、現実の話し手と上下関係にあつて、やはり「おかあさん」とか「おとうさん」とかよぶべき立場にいるのですから、観念的に分裂して敬語を使っている話し手の立場は聞き手の立場と同格なわけで、一言でいえばこの場合の親は観念的に子どもの立場に立っていることになります。

母親が「わたし」と表現したとき、子どもがこれを追体験するには、上下関係の意識をすてて母親と同格の立場に立たなければなりません。そこで、子どもがいま持っている

る尊敬感をそのままに追体験させるために、母親はすすんで子どもと同じ立場に立ち、現実の自分を尊敬感を持って扱ったのです。「おとうさん」の場合は、これと反対に、子どもが父親をバカにして尊敬感を持っていないのです。そこで、まず「きさま」と表現して、子どもが下の地位にあることを主張します。つぎに自分のことですが、「おれ」とか「私」とか表現すれば、子どもの追体験は同格の立場で行われるわけです。これは子どもにとって楽ですが、父親は同格の気もちでいることをのぞみません。この気もちをなおしたいのです。そこで、かくあつてほしいとのぞむ子どもの立場にすすんで立ち、「おとうさん」と表現したわけです。これでは、追体験のときだけでも、子どもは父親に対して尊敬感を持たなければなりません。これが父親のねらいです。いわば「ことばによるしつけ」としての敬語的表現です。

これらの例は、聞き手から話し手への規定を見おとしてはならないということと、言語研究における認識構造の正しい説明がいかに重要かということとを、教えていると思います。

解題

三浦つとむ（一九一〇—一九八九）は言語学者。

『弁証法はどういう科学か』（講談社現代新書）

『日本語はどういう言語か』（季節社・講談社学術文庫）

『こころとことば』（季節社・明石書店）ほか著書多数。

本稿は『国語通信』三五号「特集 敬語の問題」（昭和

三十五年十月 筑摩書房。廃刊）に発表された。単行本選

集未収録。転載に際して、明かな誤記誤植を訂正し、著

作権者及び筑摩書房の諒解を得た。

（上田博和）